

動物園のおいたちと使命

わが国では昨年1年間で5,000万人を超える人々が動物園を訪れています。環境破壊、人間性喪失の進む中で、動物園に対する新たな期待が寄せられているのですが、博物館週間にあたって、動物園の起源、歴史を振り返り、新しい動物園像を考えてみたいと思います。

人間と動物の結びつきのはじまりは物質的、直接的なもの、すなわち食料源、狩猟の対象としての動物でした。フランスのラスコーの壁に描かれている動物は10万年前の人類の祖先が、卓越した野外観察者であり、芸術家であったことをはっきりと示してくれるものです。これらの狩猟時代の人類の仲間として、イヌが加わったことは、ただ単に物質的代償を求める関係だけでなく、愛情、興味を通じてつながることを知る契機となったのです。現在の行動学が明らかにしているように、うまれたばかりの野生動物は容易に刻印づけられ、人間の情愛の対象として、共に生活するようになることは充分ありうることでした。定着生活の確立、富の蓄積は多くの動物を飼育することを可能にし、モヘンジョ・ダロの遺跡は既にB.C. 3500年にはゾウが飼育されていたことを示しています。古代エジプトでは各地の動物を膨大な規模で飼育維持していました。動物園と呼ぶよりも家畜化のためのこの実験農場は、現在国際保護動物に指定され、絶滅を心配されているアラビアオリックスの大群が繁殖していたこと、キリンが当時の人々を驚かし、喜ばせていたことなども教えてくれます。B.C. 1200年以降、中国では知識の園と呼ばれた場所に多くの鳥獣が飼育され、収集、研究、繁殖、記録といった仕事が系統的に行なわれ、当時の教育の一大中心地となっていました。しかしながら一般的には動物飼育は王侯、貴族の権力の誇示、また宗教的儀式の対象として利用されるだけでした。古代ギリシャでは支配者による私設動物園が隆盛をきわめ、どの都市にでもコレクションがみられるようになりました。B.C. 4世紀頃には若い知識人が、これらの動物園に集まり、動物に対する記述、観察などの学問的興味の対象として利用し、アリストテレスもこのような環境の中で育ったのです。まさに動物園が学問の場として発展した時期でした。続くローマ時

代には、動物同志、動物と人間の血みどろの闘争をみせる場所として異常な方向に発展し、数多くの動物が殺されました。しかし貴族による観賞用としての飼育もさかんで、大きなフライングケージや通り抜け鳥舎が作られていました。中世に入ってから、教会や貴族の一部による小規模なコレクションがあるのみで、動物園の歴史にとっても暗黒の時代でした。しかしレオナルド・ダ・ヴィンチ、デューラーにみられるように動物園における正確な記録の必要性や形態学的興味が、徐々にではあるが認識されはじめました。おりしもコロンブスの新大陸発見に続く宗教改革、ルネッサンスの流れは急速に移入される珍しい動物の同定を中心にした動物学的知識を必要とし、現在の動物園の基礎となるコレクションが各地に作られていきました。血なまぐさい闘技場はかげをひそめ、動物学研究の場として再び脚光をあびてきたのです。1752年フランスI世が妻のためにシェンブルグ宮殿に作った動物園（ウィーン動物園）は現存する最古のもので、近代動物園の歴史はここにはじまったといえます。特に13年後の1765年には一般大衆に公開され、社会教育の場としての重要な出発点となっています。ついでマドリッド、ジャルダン・デ・プランテ、そして1829年にロンドン動物園が設立されました。この時はじめて Zoological Garden（動物学の庭）という言葉が使われましたが、この頃設立された動物園がいずれも動物学研究にふさわしい実績を、またいずれも王宮や植物園内に設立され、自然との調和のとれた「庭」にふさわしい落ち着いた雰囲気をかもしだしているのも私たちにとって教訓的です。

以上みてきたように、動物園は研究、教育、レクリエーションの機能を持ち、はたしてきたわけですが、今後の課題として野生動物保護、特に今日的課題として広義の意味での自然保護、すなわち次の世代に豊かな安心して生活のできる環境を残すために、積極的にその役割をはたすことが重要となっています。北限のニホンザルの棲息地、青森県下北半島の自然破壊を調査し、保全運動の先頭にたった動物園の例にもあるように、地域社会と結びついた活動を強化することが大切なポイントとなるでしょう。

(I. K.)

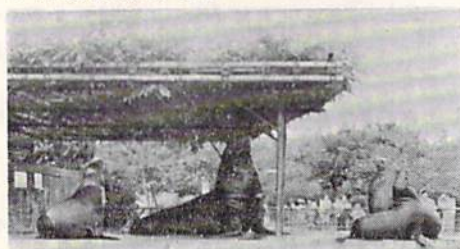
たのしい アシカ池

動物園の正門を入るとすぐ右手の方より、オーッ、オーッ、ガ、ガ、ガ、ガと、にぎやかな鳴声が聞えて来ます。これは、アシカ池のアシカ達の声です。このアシカ達は、動物園では狼島の狼と並び最高の人気者なのです。いつも多くの人々にのぞき込まれ得意気に力強くスィスィと泳いでいます。このアシカ達について、お話ししましょう。

アシカの社会

アシカは、1頭のオスが、15頭位のメスを従える一夫多妻のハレムを作ります。このアシカ池では、1頭のオス（ボス）に4頭のメスがかしづいており、それぞれのメスに1頭ずつ子がついています。だから、このボスは8頭のアシカを従えていることになります。ボスは体が大きく、メスの3倍程あります。そして、ぶくぶくと肥えており、頭の上のこぶ状のもりあがりも大きいので、すぐ見わけられます。ボス以外の成オスは、ボスに抑えられ大きくなれず、メスよりやや大きい程度で止っています。そして、ボスがいなくなれば、体も大きくなり次々ボスになります。この池にも、上記9頭の他に、成オスが1頭いますが、このオスは、両眼が白く濁り見えなくなったので、ボスにはなれないでしょう。池が大きければ、複数のボスができてそれぞれメスをしたがえハレムを作ります。

▽ 中央がボスです



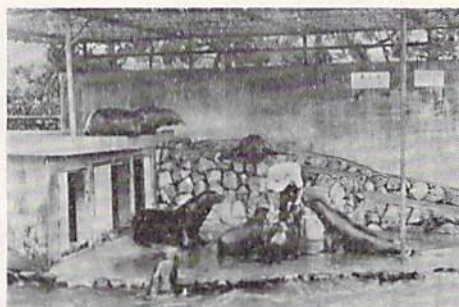
アシカの食事

アシカは、いつ見ても面白いですが、特に食事前と食事中の活発な動きは、見ていて楽しいものです。

ここでは、午前と午後の2回アジを与えています。

午前9時～10時の間に、午後は是非皆さんに見てもらおうと、3時10分と時間を決めて与えています。その様子を少しのべてみましょう。

今まで、とび込み台や島の上で長くなってねえたり、ゆったりと泳いでいたアシカ達も、3時頃からそわそわしだし、動きが激しくなります。1頭はとび込み台の上を行ったり来たりしながら、またもう1頭はとび込み台へ通ずる階段の途中に陣どり、盛んに係員



△ 食事中の7頭

のやって来る方を首を伸ばしてうかがいます。この2頭は、子持ちのメスで特に腹をすかすのか、いつも1番早くからこの動作を始めます。そして餌はその場所でもらいます。もうすでにテーブルについているのです。

一方、池の中ではボスと1～2頭のメス、それに昨年の子が混じり、常に3～4頭で陸地ぞいに、東から西へかたまってわれさきに泳ぎ、係員の来るのをうかがい、これをくりかえして待っています。この時に昨年の子に遊びが見られ、潜水から水面へあがる寸前の大きなボスの背に自分の体をのせて、おんぶしてもらいます。ある時は、ボスとこの子の間にメスが入り、ボスの背にメス、メスの背に子という二重おんぶという形になったことがあります。又、時々陸地の西端へ行き、後肢を前に曲げ背のびのような格好をして、まだ来ないかと見ているメスがいます。待ちこがれたボスなどは、よくジャンプして水しぶきを高くあげますから、西端からは注意してみてください。

さて、食事が始まります。アシカ達はしつけられてほどよく散らばり、係員の投げるアジをうまく受けて食べます。これは全てのアシカに公平に食べさせるためと、運動不足を補うために行ないます。また、哺乳中のメスには多く与えるよう加減もできます。そして、この餌を食べる場所は一定しており、アシカの強弱が決まりますが、時々変わることもあります。

食事はまたたく間に終わり、現在7頭（3頭は哺乳中）で60㎏食べ、皆まだものたりない顔をしています。この間、アシカの赤ん坊は、さわぎに巻き込まれないよう島の付近で泳いでいます。

アシカの赤ちゃん

今年は、5月30日、6月9日、そして6月23日と、3頭のアシカが生まれました。下の図のようにアシカは、毎年6月に生まれます。ボスと4頭のメスの間には、今までに14頭の子が生まれました。今年6月9日に生まれたオスは、母親が42年6月12日生まれたので、36年3月16日入園のメスにとっては、孫となります。動物園三世なのです。



△ あそぶ赤ん坊

アシカの子は、練習しないと泳げません。アシカが初めて泳ぐのは、生後1〜2週間といわれます。ここでは、母親が子を喰わえて池へ連れて行き、子と共に泳いだのを生後14日目に確認しています。そして2ヶ月もすれば泳ぎもうまくなり、池の中へ落ちたハンカチや棒切れをくわえたり、追いかけて遊ぼうになります。

哺乳は、陸地で行ない子は母親の腹にある4つの乳首からのみです。乳首が非常に小さいため、のむ時チュウチュウ大きな音がします。この音は初め程よく聞こえ、あとになると時々しか聞こえません。乳の出が悪くなるからでしょう。9月の半ばに見た例では、食事後しばらくし落ち着いてくると、母親は長くなり寝ます。すると子はそばへ来てのみはじめます。1回に20分近く飲んでいました(1日の哺乳回数わからず)。のみ終わるとそのまま母親の腹の上に頭をのせて眠りました。

このようにして母親の乳をのんで大きくなりますが、7〜8月の暑さは、子にも親にもこたえるらし

く、母親の食欲が落ち、子は十分に乳がもらえず死んでしまうものが、時にはあります。

子は翌年の3月頃よりアジを食べはじめ、離乳がはじまります。そして次の子が生まれる少し前まで乳をのんでいます。

アシカからのお願い

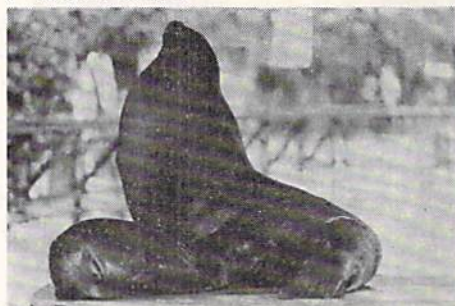
最後にアシカのお願いを聞いて下さい。

1つは「アシカ」と正しく呼んで下さい。アシカはよくなれ利口な動物のために殆ど動物園で飼われ、人気者となっています。日本の動物園、水族館ではアシカは54園中48園が飼っています。これに対してトドとアザラシは13園、オットセイは4園と少ないのです。それなのに多くの人から、オットセイとかアザラシとか間違えてよばれ、正しくアシカと呼ぶ人は非常に少ないのです。なかには説明板を前にして「あれがオットセイだよ」と、子に説明している人もあります。

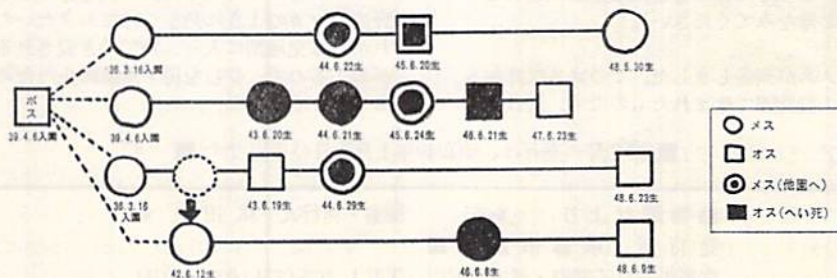
もう1つは、アシカは心ない人達のために異物を食べさせられて多く死んでいることです。アシカは投餌が習慣となっているため、石などを投げられても、餌と思いのみ込んでしまうのです。多くの動物園で異物を食べて死ぬ動物はいろいろありますが、その殆どはアシカなのです。アシカ池へ小石など投げないで下さい。他の動物と同様アシカも野生では、どんどん数が減ってきて原産地米国では保護のための法律も制定され、我国への輸入も難しくなっているのが現状です。みなさんのアシカをかわいがって下さい。

▽ 哺乳中の親子

(K.M.)



アシカの系図



動物豆知識

『渡り』

今こそツバメが渡り鳥であることは誰でも知っていますが、昔からこういうことがよく解っていた訳ではありません。動植物の命名法を考えだしたリンネが1735年に書いた書物の中には、イワツバメは冬の間は水中で冬眠し春になるとでてくる、と書かれているそうですし、また、小さな鳥は大きな鳥の背中にのって渡りをするのだと考えられていたこともあります。

渡りというツバメのように春日本に来て繁殖し、秋南へ渡っていく(夏鳥)場合と、ハクチョウのように冬の間日本にきて春になると北の方へいく(冬鳥)場合の2つを普通はいいますが、ウグイスのように夏の間は山にいて、冬になり寒くなると里におりてくる(漂鳥)タイプも、本質的には同じことなので、やはり渡りの仲間に入るのでしょう。スズメのように年中移動しない鳥は留鳥といえます。

鳥がなぜ渡りをするのか、なぜ正確に目的地に着けるのか、何が渡りをしようという衝動をおこさせ

るのか……渡りについての疑問点は数多くあります。なかなかむづかしい問題で、その多くはまだ結論がでていません。太陽や星のような天体をみて目的地への方角を定めているのではないかという説もあります。こういう方法でないと、最も長い距離を飛ぶといわれているキョクアジサシが北極圏から赤道をこえて南極海域まで渡ることには不可能であるのかもしれない。

渡りをするために飛びたった全ての鳥がそろって無事に目的地にたどりつくとは限りません。元気がない者は途中で落ちて死んでいくでしょうし、台風などにあえば、予定地ではない所になってしまうこともあります。いま日本にきている鳥が、どういう経路で何日位かかってたどりついているのか、ということを知ることは大変むづかしく困難な仕事ですが、1つの方法として標識調査というものがあります。これは鳥の足に金属製のリングをとりつけて放す方法です。リングには番号や国の名前が書いてあり、その鳥がどこかでみつかわれば、どういう経路で飛んでいったかを知る手がかりとなる訳です。こういう仕事は、いろいろな国が協力しあわなければできないので、渡り鳥条約を結んですすめる必要があります。(Y)

《できごと》

☆7月30日

ニホンカモシカが生まれました。この子供は7月生まれにちなみ「ふみお」と名付けました。尚、前号でお知らせした6月4日生まれの「みなお」は8月12日に残念ながら死にました。

☆8月1日～7日

この期間は動物園水族館週間で、昨年に引き続き、ガイドツアー(園内案内)と小学校4・5・6年を対象としたサマースクールを開催しました。サマースクールには合計159名の参加者がありました。

☆8月9日

猿が島でこの春生まれ、育った11頭の子供達に番号をつけました。麻酔をかけて眠っている間に胸へ入れずみをします。こうしておくことで正確な記録がとれるのです(本誌第2号をみてください)。

☆8月10日

ピューマのメスが到着しました。このメスは昨年5月に札幌の円山動物園で生まれたものです。近日中に

オスと同居をさせる予定です。

☆8月22日

去る7月24日に新しくきたホッキョクグマ2頭の名前を募集していたところ、この日、次の方々からいただいた名前に決まりました。

◆オス「シロ」 浅山京子さん(山王小6年)

◆メス「ゆき」 塩川一彦くん(錦林小4年)

☆8月29日

今年もホオジロカンムリヅルが3羽孵化しました。卵は去る7月13日、15日、16日に生まれ、孵化するまで親があたためていました。ヒナは昨年と同様に親から離し、人の手で育てています。

☆9月12日

ホンシュウジカ(オス)の角をきりました。本当は野生のシカのように角をつけておきたいのですが、これからは交尾期に入り、角でつき殺されるような事故がおこるので、やむを得ず危険防止のためにきります。(Y)

■ 第7号の発行は、昭和49年1月1日の予定です ■